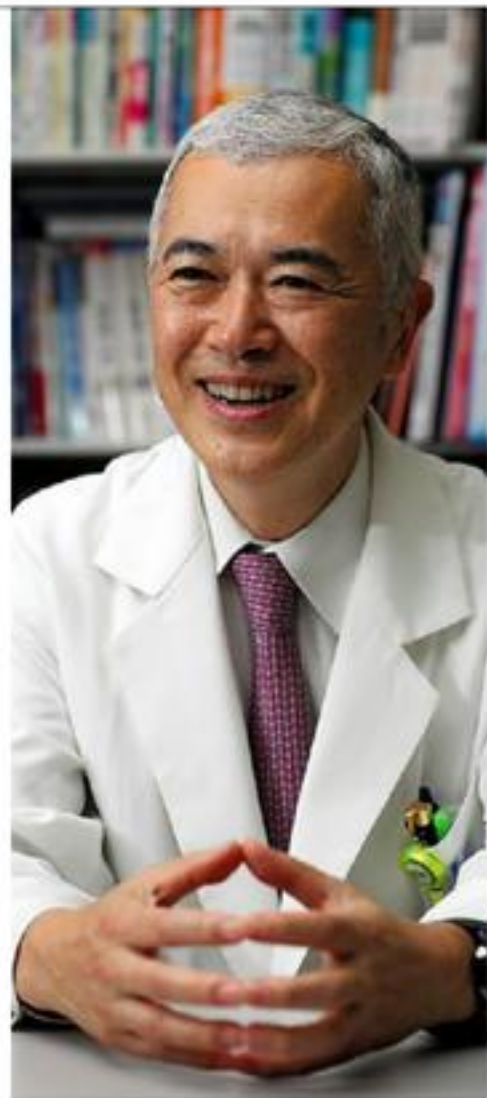


ひと

子宮内膜症の啓発に取り組む聖路加国際病院副院長

ももえだ みきお
百枝 幹雄 さん(58)

子宮内膜症は、月経血が逆流して卵巣などに付き、血液とともに体外に出るはずの子宮内膜に似た組織がそこで増殖する病だ。戦前100回程度だった女性の生涯の月経回数は晩婚化と少産化が進むいま、4〜5倍に増え、この病気に苦しむ女性が増加した。潜在患者は250万〜260万人といわれ、不妊に至る例もある。

「典型的な症状は月経痛。それが当たり前だと思って見過ごしてしまうところが問題なのです」

東大在学中、世界を駆け巡った初の体外受精児誕生のニュースに触発され、産婦人科医を志す。恩師の専門が子宮内膜症だった。国の研究班に加わって調査を続け、痛みを我慢して市販薬で紛らわせ

る女性がいかに多いか実感した。ホルモン剤を処方した患者から、「ウソのように痛みが消えた」と感謝された経験は数知れない。

この病を広く知ってもらい、産婦人科にかかりやすい環境を整える必要性を痛感し、2012年、医師らに呼びかけて、NPO法人日本子宮内膜症啓発会議を設立した。聖路加国際病院での診療の傍ら、テレビの健康番組や講演会を通じて予防の大切さも説く。

「中学・高校の段階から、きちんと診ていかないと」

ただ、10代の娘をもつ親にとっ て産婦人科の敷居は高く、ホルモン剤への抵抗感も根強い。この二重の厚い壁に挑んでいる。

文・田中啓介 写真・岩下毅